

「全少」を日本一研究する指導者による提案

ZENSHOに 挑戦しよう！



養正館館長・渡辺貴斗 第69回



ヒドゥン・カリキュラム (5) 分かりましたか？「返事」

★分かりましたか？

子供たちに、本当に理解できたかどうか、きちんと話を聞いているか、確認したいときがありますね。そんなとき、“返事をさせる”、“拳手させる”、“拳手させて指名する”などの方法が考えられます。まず、今回は“返事”について考えてみましょう。

指導者「分かりましたか？」

子供達「はあ〜い」

指導者「あれ、2人くらいしか声が出てないよ。
じゃ、もう一度。分かった人！」

子供達「ハイ！！」

指導者「よーし、みんな分かったね。それでは、
次に行きます」

このようなやり取りは、多くの道場で日常的に行われていますね。しかしながら、このやり方は、ある危険性を孕んでいます。もっと分かりやすくするために、もう少し極端にしてみましょう。

★全員でそろえて「ハイ！」

指導者「組手は、足からではなく手から動かさなきゃダメだ！」

子供達「ハイ！」

指導者「分かったか！」

子供達「ハイ！」

指導者「何度も同じこと言わせるな！」

子供達「ハイ！」

指導者「おい！今、返事してないヤツがいたぞ、

全員で返事しろ！」

子供達「ハイ！」

このように、先生が説明するたびに、「ハイ！」と全員でそろえて返事をするというルールになっている、ミリタリー式の道場も多いかと思います。よく言えば、元気よく返事ができていて、礼儀正しく理想的です。これからの人生、大人になってきちんと返事ができるということは、社会でも高く評価されます。このような習慣を、幼少から身につけることはとても素晴らしいことです。

一方、悪く言えば、分かっても分からなくても何でもいいから、とにかく「ハイ！」と言っておけばよいと、まるで返事が儀式のようになっている場合です。これでは、理解できていない子にも強制的に「分かりました！」と言わせていることになります。

これも、前回までの連載で取り上げましたヒドゥン・カリキュラムの例となります。ヒドゥン・カリキュラムとは、「こちらが意図していないメッセージを、無意識下で無自覚のうちに相手に伝えてしまうこと」です。この場面でも、指導者はそんなつもりではないのに、意図したものとは異なるメッセージを子供たちに伝えてしまっています。

この場合の間違ったメッセージは、「分かっても分からなくても、そんなことはどうでもいいから、タイミングを逃さず、全員でそろえて返事することだけを考えろ！」となります。指導者はもちろん、そんなつもりはありませんが、子供たちにはそのように伝わってしまっているということです。

★返事のタイミングを逃さない！

“全員でそろえて返事”を義務化すると、子供たちは常に返事をするよう気をつけなくてはなりませんので、指導者の話の内容が頭に入ってきません。どのタイミングで返事をするかにすべての神経を集中させているからです。先生の説明を聞くとときに、「1 拍おいて間があったら、そこを逃さず、すかさず返事をしなきゃ！」「分かったか？」と言われたら返事をしないと怒られるから、すぐに返事できるようにいつでも言えるように準備しておこう」と、いつ来るか分からない返事のタイミングを逃さないように、指導者の言葉が途切れる瞬間に、全神経を集中させています。中学生以上でやっとなでできる芸当で、幼少の子にはあまり意味のないことだと考えます。

★返事を強制するメリット？

高校や大学の部活動では、全員でそろえて返事することにより、仲間と一体感を高めたり、高揚感を得たり、指導者が全体を統率する効果も大きいので、全員で返事する利点は計り知れないことでしょう。高校生以上は、監督の話を理解できないという人はいけませんので、監督は本当に「分かったか！？」どうかを聞いているわけではありません。先述したような目的があって、返事をさせているのです。

町道場において、子供達全員に常に返事させる利点として、「子供たちが返事のタイミングを常に

はかっているということは、強制かもしれないが、少なくとも指導者の話に一生懸命耳を傾けているはずだ。話も聞いていない、返事もしない子たちよりは、まだいい方だ」という点です。確かにそうかもしれませんが、そのような子供達の中にも、話の中身を全く聞いておらず、ただパフォーマンスとして返事のフリだけしている子も少なからずいるはずです。

大事な点は、「返事したということは全員理解したはずだ」「全員で返事させると、強豪道場になったみたいで気持ち良い」「説明のテンポがよくなり、教え易い」などといった自己中心的な短絡思考に指導者が陥らないことです。「この場合、返事させるのは子供達にとってどんなメリットがあるのか？」を常に自問自答しながら、子供達のことを第一に考えた指導が求められることでしょう。

次号では、引き続き、“挙手させて答えさせる”ことについて考えていきます。

PROFILE

■渡辺貴斗 TAKATO WATANABE

1968年4月20日生まれ。7歳から父である館長から空手の手ほどきを受ける。児童心理学や成功哲学を研究して子どもたちの「心をつくる」指導法に切り替え、2013年5名、2014年・2015年7名、2016年5名、2017年9名、2018年・2019年5名を全少入賞させ、一道場での全国最多入賞数の記録更新中。道場経営でも、一道場で350名を超える大躍進を続ける。



空手道場 養正館／静岡県沼津市本町 11-12



本来の「返事」の指導とは

本稿の補足として、引き続き、理想的な返事の指導とは何かを考えていきましょう。

1. 相手の目を見て。
2. うなずきながら。
3. 「はあ〜い」ではなく、短く鋭く「ハイ！」で。
4. 上級生は「ハイ！ ありがとうございます」と「ありがとうございます」をつけ加えて。

など、返事の仕方をまず子供たちにしっかり教え込みます。そして、幼少の子には、返事を促すようなシチュエーションを作ってあげて、返事ができたらみんなの前で褒めます。そのあとは、子供たちが本当に、自ら返事したくなるような状況下で、少しずつ自分から返事をしていくというのが自然な形です。返事をしないときに叱る、というよりは、自ら返事をしたときに評価してあげる、というのが本来の返事の指導だと考えます。

養正館には私以外に、3名（清美先生・徹先生・理恵先生）の指導者がいます。「起立！」「整列！」などの指示をするときは、子どもたち全体で返事させますが、そのような場面では、他の3名の指導者は子どもたちと一緒に返事しています。返事をしない子を叱るというより、指導者が大きな声で率先して見本を見せ、気付かせます。これを“正のヒドゥン・カリキュラム”といい、プラスのメッセージを子どもたちに伝えることができます。

本稿で触れた、「分かりましたか？」の問いかけですが、子供たちは「ハイ、分かりました」と答えるに決まっています。分かっているにもかかわらず。「ハイ（分かりました）」と全員に返事させていると、分からない子が常に置き去りにされていることになるのです。“こちらを見て話を聞いているか”、“本当に理解できているか”を、子どもたち一人ひとりの目を見てよく観察することが大事です。全員に「ハイ（分かりました）」と言わせるのは、一人ひとりを観察する必要のない“ラク”な指導なのです。